# 私と社会医学

細　川　　汀

私の社会医学は、1947 年京大医学部に入学直後からすでに活動していた学生社医研に参加した時に始まる。最初の仕事は、国鉄労働者の労働負担と、CO 中毒が起きたトンネル内の環境調査だった。当時のリーダーは吉田克己先生であった。その後も西陣機業の住宅調査などをした。

社会医学研究会がスタートした 1960 年（それ以前は準備会が開かれた）は、私が大阪市衛生研究所環境医学科に勤務していた頃であった。西尾雅七先生からそのことを聞き、準備会から参加した。学会場で初めて山下節義先生とお会いして、すぐ親しくなり、亡くなられるまで親交を続けた。私の手元には「社会医学研究会」記録（第１回～第１０回）がある。私自身の発表は、第３回の低所得層の健康問題（渡辺弘先生と連名）、第４回の地域開発と住民の健康（東田敏夫先生と連名）、第７回の炭鉱災害であった。それぞれの思い出が今も鮮明に残っている。その後も京都の比叡山や光明寺での会合の思い出がある。社会医学双書「人災と健康」（西尾雅七･庄司光編）光生館の中で、炭鉱災害について執筆している。1963 年三池、1965 年夕張の炭鉱爆発の被災調査の体験から生まれたものである。

全国社医研の発足に合わせて、京大公衆衛生の教室で京都社会医学研究会が発足した。第１回の参加者は 16 名であった。以後２か月に１回開催し、帯刀弘之・山下節義先生と私が世話人になり、その中味を「社会医学研究」の名の小雑誌にまとめた。ほとんどの実務は山下先生の手をおかりした。手元にあるものは№.1 から№.90（1975 年）である。私自身も、最初のころは医療問題、あとには労災・職業病関係やソ連・東欧の事情などについて報告している。

この研究会の報告者は医学のみならず社会科学系の人も多く、延べ 200 名を超えるであろう。中味も多岐に及んでおり、毎回の出席者も 30 ～ 40 名あったであろう。すでに故人の方も少なくない。四日市公害・水俣病・森永ヒ素ミルク事件・薬害・交通災害・労働法制・障害者問題・老人保健医療・新しい職業病・社会保障など、60 年台から 70 年台前半にかけての社会医学的問題が網羅されていると言っても過言ではない。当時これらに関わった人は多かった。また近畿地方会を開いたこともある。

その後も地域保健活動についての仕事や研究会が続いた。その内容を載せた山下節義・山本繁・細川汀編「現代の地域保健」（Ⅰ～Ⅲ）法律文化社がある。また、1982 年、渡部眞也先生をお手伝いして琵琶湖畔で第 23 回社会医学研究会を開催したのも昨日のことのようである。このとき労災職業病研究の方法論について述べたと記憶している。